

弘前学院大学ティーチング・ポートフォリオ

社会福祉学部・社会福祉学科
松本 郁代

作成日 2024年1月30日

1. 教育の責務

1997年度に弘前学院大学社会福祉学部開設準備室付および弘前学院短期大学生生活福祉学科教員として採用となり、1999年度から社会福祉学部教員として、主として社会福祉の歴史や理論の講義や演習・実習を担当してきた。				
2023年度担当授業				
科目名	学年	授業種別	開講学期	概要
基礎演習 I	1年	演習	通年	学問の基礎を演習によって学ぶ
専門演習 I	3年	演習	通年	日本における近現代の社会福祉の歴史を演習によって学ぶ
専門演習 II (卒業研究含む)	4年	演習	通年	上記と同様
社会福祉発達史	1～4年	講義	前期	日本における社会福祉を学ぶ
社会福祉発達史B	1～4年	講義	後期	日本における社会福祉を学ぶ
社会福祉原論A	3年	講義	前期	社会福祉の理論や制度を学ぶ
社会福祉原論B	3年	講義	後期	社会福祉の理論や制度を学ぶ
社会福祉実習 I	2年	実習	集中	社会福祉の現場における実習
社会福祉実習 II	3年	実習	集中	社会福祉の現場における実習
社会福祉実習指導 I	2年	実習	集中	社会福祉実習 I の事前事後指導
社会福祉実習指導 II	3年	実習	通年	社会福祉実習 II の事前事後指導

2. 教育の理念

教育の理念として、次の3点を念頭においている。それは、(1)本物志向(2)能動的学習(3)できない状態を誤魔化さないという3点である。

学生には、可能な限り、教材として一次史料を提供する。例えば、戦前における旧法令は、現在刊行されている文献で閲覧することが難しい。そのことから、『法令全書』や厚生労働省のホームページといった原典やそれに近いものから取り出して、教材とするということである。また、テキストに出てくる事項や事柄や人物についても、近代以降の日本において慈善事業施設の開設にあたり取り組まれた慈善音楽会に際して作成された招待状の原本や感化院の案内文書、現在の母子健康手帳の原型である妊産婦手帳(個人情報を書き込まれていないもの)や山室軍平の名刺といった実物を見せるということである。

基本的には、情報について、学生自らファクトチェックが必要であることを伝えている。つまり、人から聞いたことが、すべて本当のことだとは限らないという認識を社会科学として社会福祉学を学ぶ学生に伝える必要があるということである。入手した情報が、何を根拠にされたものであるのか、どの文献のどこにどのように書かれているのか、それを情報として取り入れる必然性が何かを説明できるようになることである。

その為には、読めない文字を放置せず、判らないことを能動的に調べることによって、疑問を解決する手助けをしつつ、学生が判らないことを放置するなど、調べることを諦めないように助言し、必要に応じて図書館にも同行して、ともに実地に文献検索を行うといった諦めない教育を念頭においている。日本では、大学が人生において最後の教育機関であることが多いことから、大学入学前に身につけていない勉強の基本的な方法を修得する最後の機会であることを意識している。

数十年前に行った教育実習において、担当して下さった先生から、「子どもたちは、勉強ができるようになりたいと常に願っている。」と日誌に書いて下さったことを念頭においている。出来ないことをいかにして、出来るようにするのが問われていると考えている。

3. 教育の方法

学生たちの中には、高校までの間に図書館に行ったことがない学生や、小説などであっても、一冊の本を読み通した経験がない学生が存在している。しかしながら、学問の場においては、図書館の蔵書検索や資料を読むことと切り離すことは出来ない。そのことから、学生自らが日常的に文献を検索することと読むことを、講義・演習・実習指導の時間で設定しており、以下、そのことを含めて述べることとする。

「社会福祉発達史A/B」：指定した社会福祉の古典や学術論文の検索や複写について、自ら行うように課題を出し、それを持参することによって、講義が受けられるようにしている。指定した文献は、図書館において、あらかじめ禁帯出とした文献で入手しやすくしており、予習をすることも可能であるようにしている。毎回小テストを行ない、定期試験で合格点に達しない場合に、小テストの点数を10点まで加点できるようにしている。

「社会福祉原論A/B」：講義で使用する文献について、学生自ら複写をして持参するように指示することがある。また、小集団で討論をして、報告をする指示を出すことがある。

上記二つの講義科目においては、定期試験において客観式・短答式の問題を出し、配点や正解を掲示している。それによって、教員の恣意が入らない採点となっていることが判るようにしている。

ゼミでは、ゼミ生全員が、毎回レジュメを準備し、報告し議論することとしている。読めない漢字や意味の分からない用語について、あらかじめ辞書を引いて本に書き込みをするように指示している。

4. 教育の成果

そもそも机の上の勉強をすることについて、「座学」と呼んで軽視する風潮が、教員にも学生にもあることから、それが変わらない限り、成果として期待できない。しかしながら、細々とした成果としては、指示をする前に、講義や演習中に自ら辞書を引いて調べ、パソコンやスマホから文献検索サイトを開いている姿を見かけることがある。また、「社会福祉発達史B」において、学生が書いた感想には、近代以降の社会福祉行政について、とくにハンセン病に対する法律を『法令全書』を紐解くことによって学んだことが印象的であったと書かれていた。また、社会福祉実習指導Ⅱにおいて、実習前の事前指導において指示したことで理論について正確な理解に繋がり、実習先で困らなかったとの報告を学生から受けたことである。

尚、社会福祉学においては、社会福祉における援助として、グループワークという伝統的な方法を駆使することが知られている。ここでは、社会福祉実践そのものについて記述しているわけではなく、教育の場における方法について書いているものである。そのことから、後で触れることとなる教育の改善においては、グループワークという呼称を用いるのではなく、学生が小集団でディスカッションを行う場合には、小集団活動と呼んで用語の使い分けをして、ゼミ内の小グループをサブゼミ、ゼミ全体やその運営については、プロゼミという言い方で呼ぶこととし、昨年度は、それをゼミ内で定着させた。

5. 教育の改善

(1) 講義について

この項目については、環境整備に関する内容が含まれており、次のように行ってきた。それは、かつて社会福祉学部開設後数年の2003年当時の授業評価において、講義で声が小さくて聞き取れないといった学生からの苦情があり、それに対応してきたという件である。つまり、マイクを毎回使用することとし、現在に至っているということである。また、筆者の体格に比して黒板の位置が高く、学生から見やすいものになっていなかったということである。これについては、履修登録者の減少に伴い、適度な教室に変更した。さらに、多くの史資料を机に広げて読み解くことから、大きなテーブルを配置している教室を選んだことである。

(2) 演習について

2022年度の「基礎演習Ⅰ」において、演習前に学生たちが小集団でサブゼミを行ない、ゼミにおいて議論すべき論点を整理しておくように指示した。プロゼミにおいては、科学的根拠となる文献を挙げて議論するように指示している。

(3) 入学前課題を出す際に、大学においては、文献を読むことが必須となることを伝え、読めない漢字に振り仮名をつけ、意味を調べ、本の中に書き込みをすることを提案した。入学後の学生の中には、これらの指示を厳しい指導であると認識する者がいるが、基本的な勉強の仕方であるとの理解を入学前に促している。

6. 教育の目標

教育活動についての当面の目標は、大学らしい授業をすることである。筆者の担当科目は、理論や歴史に関わるものが多く、この領域について、本学の学生は苦手意識をもつ傾向がある。しかしながら、上記でも触れたように、社会福祉理論で学生が誤った理解をしていた際に、調べ直すように指示をしたところ、学生自らが文献を紐解くことによって、その誤謬に気づき、認識をあらため、学生が自信をもったことがあった。このことから、ファクトチェックを行うことを含めて、学生が主体的に文献に向かい、辞書を引くということを強制されたと受け止めるのではなく、当たり前なこととして認識できるように仕掛けをすることを当面の目標とする。

また、とくに演習科目や実習の事後指導科目においては、学生とのやり取りを録音し記録することによって、学生との双方向の授業となっているかどうかの点検を行ない、学生によるサブゼミ運営に助言をしながら見守ることとする。また、学生による議論の場においては、科学的根拠に基づいた議論となるように、文献の読み取りにも注視していく。さらに、筆者が授業をする際に、ゆっくり話をするを授業全般の目標とするものである。

【資料】

1. シラバス
2. 2002年度学生による授業アンケート
3. 2023年度学生による授業についての感想
4. 榎本博明(2021)『読書をする子は〇〇がすごい』日本経済新聞出版本部
5. 松本郁代(2022)「歴然として存在しながら」『青森県看護教育研究会ニュース』58, 2.
6. 齋藤茂男(1981)『事実が私を鍛える』太郎次郎社